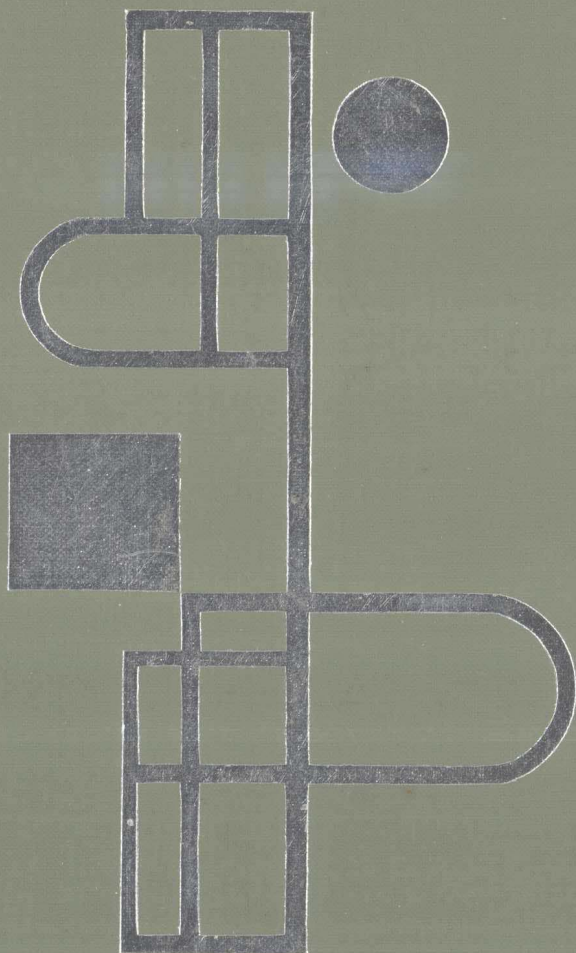
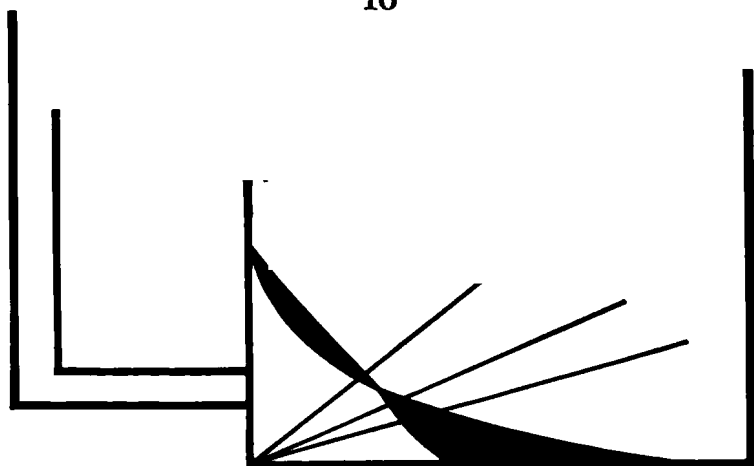




石川達三 集

新選 現代日本文學全集

16



筑 摩 書 房 版

新選 現代日本文學全集 16



石川達三集

昭和三十四年七月十五日 発行

著者 石川達三

発行者 古田 晁

印刷者 山田 一雄

発行所 筑摩書房

〔電話〕東京二九局(29) 七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

製本 印刷 株式會社 高陽堂
整版 株式會社 精興社

石川達三集 目次

風にそよぐ葦	五
ろまんの残党	三四
熔岩	三九
交替期	四〇
手切れ	四八
石川達三論	伊藤 整 四六
解説	久保田正文 四〇

装
幀

恩 恩
地 地
邦 孝
郎 四
郎 郎

石川達三集

前編

1

外務省の正門の、大きな鉄格子がとりはずされてあつた。正午にかい烈日の照りかえるなかで、七、八人の人夫が汗を流しながら、その扉をトラックの上に押しあげようとして騒いでいた。

ひろびろと殺風景になつた門柱のあいだを通つて清原節雄は街に出た。正午に東京会館で葦沢と会う予定である。街路には板の木の並木がずつと桜田門までつづいていて、青い陰が歩道に落ちている。その陰を辿りながら彼はゆつくりと歩いていた。歩きながら、何だか嫌な氣持だつた。

野村大使とハル国務長官との間でこの春から続けられてきた日米会談は、いま完全に停頓している。三国同盟と大陸からの撤兵問題とで暗

礁に乗りあげ、二進も三進も行かなくなつてしまつた。そのときになつて日本の外務省が門扉を取りはずしたのだ。何か不吉な予感がある。アメリカ局長にその理由をきいて見たところ

が、彼は皮肉な笑いを洩らして、「大砲の弾丸を二、三十発こしらえるんですよ」と言つた。

一週間まえに『金属回収令』という閣令が公布された。四年に亙る日華事変のために鉄も銅も足りなくなつたのだ。あらゆる家庭とあらゆる事務所の、門扉や煖房器具や窓格子や花瓶や傘立てを鋳つぶして、それを支那大陸の山の中に叩きこもうという策略だ。

それほど金属の足りないというのに、陸軍はまだこのうえ新しい戦争をはじめようとしている。北九州のささやかな石炭と新潟の石油と、家庭から取りあげた鉄瓶や傘立てとで、米国と英国とを屈伏させようというのだ。

歩道をぶらぶらと歩きながら、彼は年甲斐もなく腹が立つてきた。英国に三年、米国を七年もあるき廻つてきた彼は、サン・ビードロ、ロングビーチのあたりに林立する石油井戸も知っている。パーミングラム、マンチエスターあたりの鉄と石炭も見えてきた。戦争資源をくらべたら、一対百だ。

一昨日、宮中で御前会議があつた。そのことについて、昨日も今日も新聞は一行の記事を書かず、ラジオ・ニュースも報道されなかつた。清原節雄は外務大臣に会つてみるつもりだつた

が、彼はまだ来ていなかった。そしてアメリカ局長はまるで何も知らないのだつた。「御前会議があつたことは知っています。しかしその内容については何も聞いていませんね。どんな会議だつたんですか」

呆れた話だ。対米外交の重大な転機を、アメリカ局長さえもまだ知らされてはいなかつたのだ。況んや一億の国民、誰ひとりとして知りはない。知らないうちに戦争の危機はちかづきつつある。被害を受けるのは彼等だ。しかも彼等に何の発言権もなく、反抗する自由も与えられてはいない。

桜田門の角をまがると濠端の風が吹いてくる。公園の樹木の茂みに沿うた涼しい日陰の道を彼はゆつたりと歩いて行つた。やや汚れた白服、型の崩れたバナマ帽子、穴のあいた靴をもち、ポケットには外国雑誌を二冊も押しこんで、風采は一向にかまわれない。十年の外国生活の名残らしい瀟洒たる匂いはどこにも感じられなかつたが、外交評論家としての彼の存在は、近衛内閣の対米政策を、閣外に在つて支えている一本の柱であつた。

日比谷交差点の濠端には、正午の休み時間に近所の事務所から出てきた勤め人や女事務員が群れになつて、お濠の鯉をながめていた。数十匹の大きな鯉は投げこまれる餌を争うて魚紋をえがき、見物の人たちは肥つた鯉の腹に食慾を感じている。両方とも食慾だ。

清原節雄はその群れをぬけてお濠の岸を丸之

内の方へ歩いて行つた。遠からず政変があるだろうと彼は思つていた。近衛もやりにくかつたに違いない。外務省には松岡外交の余燼が今もなお残つていて、近衛、豊田の外交方針を喜ばない感情がある。

松岡は陸、海軍と手を握つていた。閣議における外務大臣の意見は陸、海軍の要求をも代表してゐたから、近衛はいつも発言を封じられていた。第二次内閣を組織した直後から、松岡はまず三国同盟を結び、アンリ大使と交渉して北部仏印への進駐を遂げ、タイと仏印との紛争に乗りだし、ドイツへ行つてヒトラーと会い、最後には南部仏印進駐への道をつけた。この六月の末に陸、海軍の首脳部は進駐計画をもつて松岡をたずね、日仏共同防衛協定の締結を求めたのだつた。外務大臣はそのとき、「仏印南部に進駐すれば世界戦争がおこり、陸、海軍はシンガポールまで攻めなくてはならなくなるが、それでも宜しいか」と一本釘をさして置いてから七月二日の御前會議にこの提案を持ちだした。近衛は絶対反対だつた。しかも彼は陸、海軍の押しの強さに負けてしまつたのだ。彼が松岡洋右と手を切ろうと決心したのはこの時だつた。それでも彼はなお諦めかねた。そして十二日の朝、外務省にむかつて、

「もしも南部仏印に進駐すれば日米会談はどうなるのか」と気の弱い反問を發した。

松岡の腹心である南洋局長齋藤晋次は、總理からの質問を受けるとすぐ、間髪を容れずヴ

ィシーにいる加藤外松大使に宛てて電報を打たせてしまつた。日仏交渉がはじまつた。

それから三日目、近衛は覚悟をきめて閣僚の辞表を取りまとめ、最後に書記官長が病氣静養中の松岡のところへ行つた。

「この通り全閣僚の辞表をまとめましたから、外務大臣にも一つ御署名を願ひたいのです」

有無を言わせない処置だつた。それがせめてもの近衛の復讐であつたのだ。松岡は黙つて署名し、書記官長を帰してからやにわに牀の上に起きあがると、枕をとつて部屋障子の叩きつけた。障子の骨が折れて枕は外の廊下にころがつた。

「近衛が、近衛が……」と彼は叫んだものだつた。「あいつが、日本の国運をあやまるんだ！」

翌日、大命は再降下して第三次近衛内閣が成立した。ただひたすらに日米会談を妥結せんがための組閣であつた。しかし松岡が残した共同防衛協定は僅か十日のうちに締結され、日本軍は南部仏印にむかつて雪崩のように押しわたつて行つた。そして日本資産は世界各地で凍結され、日米会談は停頓してしまつた。

その結果が一昨日の御前會議である。近衛は落胆しているに違いない。外務省の鉄門はとりはずすのが当然かも知れない。もはや外務省の権威は陸軍の手に奪ひ去られてしまつたのだ。

清原節雄は濠端をあるいて東京會館の玄関をはいつて行つた。建物の中はほの暗く、冷えびえとしていた。白服のボーイが近づいてきて、

「葦沢さんがお待ちになつておられます」と彼に告げた。

午前十時に葦沢悠平は家を出た。それまでは何事もなかつた。

出るときに妻にむかつて、

「今日は月曜だから、清原君に会う筈だが、用はないか」と言つた。妻は清原節雄の妹である。

「そうですね」と茂子夫人は考えた。「別に用事つてありませんけど、何ですか近ごろの世のなかの動きが兄さんの意見と違うでしょう。兄さんは一本氣で融通が利かないから、少し心配ですわ。そういつて置いて下さい」

そのくらいの心配なら誰でも持つている筈だつた。別に氣にもとめずに彼は外へ出た。ガノリン重点使用規則という制度が実施されてから、彼の自動車は使いものにならなくなつて、車庫のなかで錆びついてゐた。

電車は海の見える高架線のうえを通り、鳩の群れが輪をえがいて飛んでいる新聞社の高い建物と建物とのあいだを抜けて、東京駅のフォーラムにはいつた。

葦沢社長は新聞をたたくで右手に持ち、左の腕に篠のステッキをかけてゆつたりと駅の階段を降りて行つた。五十を幾つかすぎた丈の高いからだに純白の麻の服を着てバナマ帽子をかぶり、やや長目に刈つた半白の髪が美しく、匂うばかりに清潔な紳士である。オックスフォード

ドで三年の学生生活を送った、その当時の教養が今になって身について来たという姿である。

駅前の広場は朝の強い日光に満ちていて、残暑は真夏ほどにきびしかった。鈴懸の葉の茂った下を彼は急がずに横切つて行つた。群衆の波が流れては絶え、絶えてはまた続く。高い建物にかこまれたこの広場の風景はもう幾年のあいだ些かの变化もなかつたように思われる。しかもその中に移り変わる時代の色が少しずつ加えられていた。仔細に注意して見るならば四力年に互る(日華事変)に苦しんでいる日本の姿が、縮図となつてこの広場の到るところに見られるのであつた。

高い建物の屋上から垂らした白布には大きな文字で『大政翼賛』と書いてある。『臣道実践』と書いてある。日の丸の旗をかかげた下には『聖戦完遂』と書いてある。その四角張つた文字のかげに苦悶する国家の表情が歪んでいる。国旗や団旗をかかげた群衆が列をなして宮城の方に向かつて行進して行つた。先頭のあたりから喇叭の音がきこえる。広場を横切つて毎日の勤めにかよう人たちの半数はカーキ色の国民服を着て、兵隊まがいの戦闘帽をかぶつていた。昭和十五年十一月、政府は国民服令なるものを公布して一億の人民に制服を着せようとした。そのカーキ色の服を着ると同時に、彼等はその心にも制服を着てしまつたのだ。

葦沢悠平は制服を着ない。白麻の夏服は身だしなみであると同時に、彼の自由なる心の象徴

でもあつた。ビルディングにはいり、扉を開いていたエレヴェーターに乗る。

五人の男が先に乗つていた。彼が入ると同時にその中の二人が、不思議な光をもつた眼で彼の顔を盗み見た。この暑さに二人とも灰色の背広を着てきちんとネクタイを結んでいた。そのまま黙つている。箱は上昇しはじめた。彼の胸に一種の直感がきた。私服の特高刑事である。四階まで来て三人は降りた。残つてるのは例の二人と彼とだけだ。五階。彼等は身じろぎもしない。社長もまたステッキを杖に冷然と向いてあつていた。

箱は再び上昇しはじめた。特高刑事に襲われる可能性は十分にある。彼が主宰している綜合雑誌『新評論』に対して、憲兵隊と警察とは常に監視の眼を光らせているのだ。自由主義的だからいけないというのである。六階。……

葦沢社長はエレヴェーターを出て歩きはじめた。果して彼のうしろから二人の足音がついて来る。かすかに頬の肉がこわばるのが感じられた。……この四年のあいだ、どれほど軍部の官僚のわからず屋共によこしまされて来たことか。自分の自由主義が彼等から非難される理由はない。仄暗い廊下に三人の足音が堅くひびいた。うしろの二人は一跳びで彼の肩に飛びつけるほどの距離を、どこまでもついて来る。

金文字のはいつた厚い硝子の扉のまを幾つか通りすぎる。東山炭鉱株式会社、東京宣伝美術研究会、共同精機株式会社、弁護士内村岩雄

法律事務所。……彼はどこまでも同じ歩調で歩いて行つた。見苦しい姿は見せたくない。二つの角を曲つて、事務所は左側の三つ目の扉だ。ふと彼は、特高刑事を案内しているような腹立たしさを感じた。

『新評論社』と金文字のはいつた扉に手をかけて静かに押した。聴覚が鋭敏にはたらく。彼の耳は彼の背後を黙つて通りすぎて行く二人の足音を聞いた。ふり向きもせずには彼はうしろ手に扉を閉す。足音は廊下に反響しながら次第に遠ざかつて行つた。一瞬間、頭を上つていた血液が爽やかに流れ下るのを感じた。

社長室は建物の角になつた白い部屋で、四つの窓から吹きこむ大空の風が涼しくカーテンをふくらましてゐる。女秘書にステッキと帽子をわたし、彼はさつと上着をぬいだ。翡翠のはいつた金のカフス釦が青々と光る。

「さきほど清原先生からお電話がございました。」

「うむ」

「正午に東京会館へおいでになるそうです」

「ああそう」

「それから岡部さんがお待ちになつていました」

「うん、呼んでくれ給え」

葦沢社長は窓に立つてワイシャツの背に風を受けながら煙草を啜えた。かすかに、特高刑事に怯えた今しがたの自分に腹が立つていた。誰を恐れる必要があるものか……ところが事實は

恐れなくてはならない奇怪な世の中であつた。戦争が続けばつくほど、一層おそろしい世の中になつて行くだろう。今日は刑事の襲撃をのがれた。しかしいつかはあの二人が本当にこの部屋へ闖入して来るに違いない。悪い予感だ。扉をノックして岡部編集長が姿を見せた。小肥りの艶々した頬から少し禿げあがつた明るい額まで、良い血色をしている。無遠慮な大股ではいつて来るといきなり、

「社長、またやられました」と早口に言つた。「さつき陸軍報道部から電話で編集長にすぐ来いと言ふんです。今から行つて叱られて来ます。九月号の清原さんの原稿のことだと思ふんですよ」

「ふむ。またか、……御苦労だね。何んとか一つうまく話をして来たまえ」

清原節雄の論説は立派なものだつた。それだけに軍部は嫌がるのだ。今朝家を出るときに妻が清原の一本気を心配していたが、やはり予感があつたのだ。

岡部編集長はニュースに対して敏感な性質をもつていた。彼はあらゆる事件に関して裏面の消息を知っている。それが自慢なのだ。事件の裏から裏をたどつて行くことによつて彼は一つの特等な見解をつくり上げていた。流言飛語は彼にとつて重要な意味をもつていた。

半袖の白いシャツから剃き出しになつてゐる太い腕を胸の前に組みあわせ、椅子の腕木に腰をかけると例の早口でしやべり始めた。

「清原先生の、南部進駐と対米外交、あの論説で見ますと進駐は対米戦争の準備だというんですが、僕は軍部の謀略じやないかと思ふんです。その前にソソ戦争がはじまりますよ。東部戦線でドイツはぐんぐん押していますからね。日本はこの機会を利用するでしょうね。一挙にソ連を始末して置いて、それから南方作戦をゆつくりやるつもりだと思ふんです」

「ふむ、そうかね」

「そうですね。今年の六月ごろから北滿に集結している部隊の数はおびただしいもんです。ちかごろ内地で召集を受けた者の四割までは、入隊と同時に滿洲へ連れて行かれています。それからですね、八月末に朝鮮から歸つて来た友人の話ですと、京城の飛行場を経て北へ行く飛行機の毎日三十機を下らんと言つています。朝鮮の東海岸の清津と羅津、あそこに素晴らしい飛行場ができてゐるんですよ。陸軍は開戦と同時に、ウラジオの軍備を半日で壊滅させて見せると傲語してゐるそうですね。それからですね、僕の郷里の鹿兒島から最近出て行つた部隊はみな冬服を持たされて行つたという事実もあるんです。面白いですね」

「ほう、そうかね」と社長はうなずいた。うなずきながら、信じてはいなかつた。

「まあ、一つ行つて見ます。大したことはないでしょう」と立ちあがると、岡部熊雄は忙しうに出て行つた。

元氣な、潑刺とした男であつた。働くことが

好きで、少年のように移り氣だ。政治や軍事のからくりを手品のように巧みに解きはごして見せる。しかしながら彼の本当の心は傍観者であつた。彼は戦争に加担するのでもなく、反対するのでもない。事件が拡大され複雑化すれば、彼は興奮する。戦争のスリルが彼を夢中にさせるのだ。戦争は彼にとつて、この上もなく面白いスポーツであつた。そして彼の予想が中らうと外れようと、彼は少しも責任を感じはしない。戦争がどうなるうと、国民生活がどんなに悲惨にならうと、彼の心に憂いはない。流言飛語を聞きあさり、外交交渉の紛糾に興奮しながら、実は全く孤独なのだ。彼はどんな思想にも心から共鳴はしないし、団体にも加入しない。徹底的に傍観する、孤独な明るい人格であつた。そして彼のような傍観者がどうかすると鋭い批判をもつた真の愛国者のように見えていたのである。

彼に比べれば葦沢社長はほとんど何事をも語らない人物であつた。いつも変らぬ静かな表情をたもつていて、取り澄ました貴族主義者を思はせた。言葉はおだやかで、落ちつき払つた態度を装うてゐるように見える。彼こそは戦争に對しても国家に對しても傍観者であるように思はれた。その冷然たる態度が、軍報道部や特高警察から白い眼で見られる一つの原因にもなつていた。

岡部熊雄は彼の女婿である。

毎週の月曜日に会つて、昼食をたべながら近況を語りあうという習慣は、もう七年もつづいていた。

東京会館のお濠にむいた涼しい小部屋で、二人は軽い食事を注文した。彼等はオックスフォードで三年の学生生活を共にした。三十年來の友人である。清原は妹と一緒に英国に行つていた。留学を終つてから三人で北米にまわり、葦沢はその妹を託されて二人で帰国したが、清原はそれから七年も米国に留まつて新聞記者をしていた。悠平が清原の妹と結婚したのは帰国した翌年であつた。

留学三年の葦沢悠平は貴族的な瀟洒たる紳士になり、欧米に十年を過した清原節雄は身だしなみを忘れた老書生の姿をしていた。一方は綜合雑誌の社長であり他方は一本のペンに生命を託して自由なる論客となつてゐる。月曜日の食事の時間には葦沢が聞き役で清原が多く弁ずる役目であつた。

「昨日の夕方、尾崎君に会つてね」と彼はパンをむしりながら言う。

「尾崎秀実？」

「うむ。近衛のところから帰り道に寄つてくれたんだ。その時の話が心配になつて、今朝は外務省へ廻つて見たんだが、日米会談は近いうちに破綻を来すね」

「どうもそうではないかと僕も思つてはいたがね」と社長は首をかしげた。

「土曜日に御前会議があつたんだ」と清原は皿

の上の肉を切りながら言う。「その会議というのが始めから陸軍の計画したものだつた。九月一日に馬淵報道部長が放送演説をやつたね。例の『ぐずぐずしている』と日本はじり、貧に陥る。實力に訴えても対日包囲陣を突破して云々」という、いわゆるじり、貧演説だ。あの時から僕は予感があつた。御前會議に於ける東条の言い分もそれだつた。近衛にむかつて、日米会談をこれ以上引つばられては困るから期限を切れと言つたんだ。ということはだね、第三次近衛内閣の使命は終つたものと認めたのだよ。いわば近衛に辭職をせまつたということだよ」

「思ひあがつてゐようだね」

「思ひあがつてゐるさ！ 馬淵はじり、貧だという。そのじり、貧に陥るような資材しかなくて、英米連合軍を相手にしてやれる道理がない。軍人は二た言目には（国運を賭して）と言うが、冗談じゃないよ。そんな輕率に国運を賭されてはたまつたもんじやないからね」

「ふむ、それで尾崎君は何んと言うんだ」

「近衛がね、もう自分の力が戦争を防止することとは出来なくなつたと言つたさうだ。彼が匙を投げたら、もう誰も陸軍に楯ついて火中の栗を拾うものはないよ」

また新しい戦争がはじまる。……葦沢にはこの友人の見解が信じられた。そして彼自身の置かれてゐる現在の立場が、次第に困難を加えてくることが予想された。悪い予感がある。いつまで無事に雑誌社をつづけて行かれるだろうか。

現に、岡部編集長は軍報道部に呼びつけられてゐるのだ。

ボーイがはいつてきて、葦沢社長に自宅から電話がかかつて來てゐると告げた。彼はナプキンを食卓の上に置いて廊下へ出て行つた。

しばらくして元の部屋に戻つてきたとき、年齢のせいでややたるんだ彼の頬には微妙な笑いの影が漂うてゐた。羞恥のようでもあり自嘲のようでもある。永年の友人だけが知つてゐる心と心の響きによつて、清原はその笑いの意味を察し得た。自宅に、何か面白くないことがあつたに違いない。

再び悠平が銀のフォークを手にとつたとき、彼は唇を拭きながら赤いガーベラの花越しに言つた。

「何かあつたのか」

「うむ……」と彼は口ごもつた。

「いや、実はいまね、君には子供がなくて仕合せだなと、思つていたところさ」

「何のはなしだ」

「君の甥に、いましがた召集令状が來たさうだ」

「ああ！ それは困つたな」と伯父は打ち返すように言つた。「泰介は君、兵隊には向かんよ。可哀想だよ。あんな青年は君、弁護士がいいんだ。弁護士が一番いいんだ。乃至は君のあと継ぎで雑誌をやらせるか、どちらかだよ。泰介を兵隊にして何の役に立つもんか。尤もそんなことを言つて見たつて仕様ががないがね」

「全くだ」と父は冷静を失わずにうなずいた。「戦争」というものは、人間を無駄づかいするものだよ」

泰介は彼の長男である。結婚して一年にしかならない若い妻もある。智能もすぐれ、性格もまっ直ぐな良い青年であつた。それが東大の学生時代に社会運動に加担して未決にたがれたのだつた。まっ直ぐな性格の、すぐれた青年だつたからこそ、社会運動にはいつたのだ。父が八方奔走したお蔭で起訴猶予になつて帰つたが、それからは社会運動と縁を切つて私立大学の法科に学んだ。在学中に高等試験に合格したけれども、官庁はこの秀才を採用しようとはしなかつた。左翼運動のささやかな経歴が、終生彼につきまといつて災を及ぼすものようであつた。

今年の二月から、彼は先輩の山根弁護士事務所につとめて、弁護士となるための実地の勉強をはじめている。来年の春には独立して法律事務所をもつことができる筈であつた。苦難にみちた青春を経て、ようやく社会に出ようとしている彼を、いま戦地に追いやつてしまうことは、父にとつて忍びない思いである。葦沢悠平は食事の途中でフォークを置いた。食事が喉に通らない氣持だ。

一日、宮中で御前會議があつたという。清原節雄の見解によれば、近衛内閣は軍部によつて否定され、政変は遠からず起るであろうという。戦争の危険をふせぎ止める力は、議会にもない、政府にもない、天皇にすらも無い。新し

い巨大な戦いが眼のまえに迫つている。新しい敵は龐大な空軍と海軍とをもつている。血と炎との渦がまきおこつてくるだろう。

その渦のなかに愛する長子を送り出してやることに、父は耐え切れぬ苦悶を感じながら、表情はあくまでも冷静に、動作はあくまでも沈着に、ふたたびフォークを取つて食事をつづけるのであつた。悪い予感が、黒い水のように湧きあがつて、胸のなか一ぱいにあふれてくるような氣がした。

2

「もしもし、あなた?……もしもし、あなたですか?」

妻の声はせきこんでいる。泰介は受話器を耳にあてたまま眉をしかめた。午前中に自宅から電話をかけて来たことはいままで一度もなかつた。

「もしもし、榕子です。おわかりになつて?」

「ああわかつたよ。何だい」

「あの……」と言つて声が跡切れた。その短い無言の瞬間が不氣味だつた。

「あの……あなたに、しようしゆうが来たんですよ」

「なに?……何が来たんだ」と彼は聞きなおした。咄嗟に意味はわかつたが、聞き返さずには居られなかつたのである。

「しようしゆうです、兵隊の、召集令状です」と榕子の声はせい一杯に叫んでいる。

「ああそうか、わかつた」

「どうなさるの?」

「どうなさるつて、……それでいいじやないか」と泰介は平静に答えた。

妻の声は再びとぎれた。どうなさると良人に

たずねたのは、最後の逃げ道を良人に問うたのである。自分の不幸から逃れる道を良人が知つてゐるかも知れない。それを聞いて見たい女心であつた。「それでいいじやないか」と言われて見れば、やはり逃れる道は無かつたのだ。今後数年にわたる孤独は確定した。もしかしたらこれつきり未亡人になるのかも知れない。榕子はあとの言葉に詰ると、

「それで、どうなさるの?」と再び同じことを言つた。

「そうだな、とにかく帰ろう。三時ごろまでには帰れるだろう」

「帰れますか。お父様には今から電話でお知らせしますわ」

「ああ、よし」

「早くお帰りになつてね」

「ああ、よし」

「あの、沢山用事がありますからなるべく早くね」

「ああ、よし」

受話器を置くと、やはり呆然としていた。この法律事務所の中の世界が、急に自分とは縁が切れて行くようであつた。机の上にひろげた訴訟書類、六法全書、本棚にある判例全集、机、

インキ壺、沢山の郵便、二人の来客。……いままで彼はそれらのなかに埋まつて、そこに安定した自分の席をもつていた。いま、自分は宙に浮いてしまつて、赤の他人である。硝子窓の外から部屋のかなかをのぞいているように、手がとどかない。自分のものではなかつた。

ともかくも元の机に坐り、一本の煙草を啜える。これからどうなるのだろう。そう考えてみて、彼は慄然となつた。漢口、長沙、太原、広東。血と火薬と死骸と、無限につづく苦難の月日。ニュース映画で見た沢山の戦場の場面がおもひ出される。絶望だ。絶望であるということに早く気がついて、本当に望みを絶たなくてはならない。

彼はひろげていた書類を閉じ、紙の袋に入れた。ともかくも事務の引きつぎをしなくてはならない。山根先生に挨拶をしなくてはならない。部屋の中を見まわす。先生は来客にむかつて、威厳をつくらつた様子で話をしている。給仕は屋食の茶をわかしている。電話がかかつて来た。もう電話にも用事はない。孤独な、さびしい気持だ。自分ひとりが瀕死の姿でいるのに誰もまだ気がついていないのだ。

「先生……」と泰介ははにかみながら言った。「いまうちから電話が来まして、僕に召集が来たそうです」

「や！　そうか……」と山根弁護士は腕椅子の
中で肥えたらだを捻った。

大袈裟に愕いた表情をしている。しかし本当

は何ともないのだ。給仕の青年が土瓶をぶら下げたまま佇んで見ている。他人を見る傍観者の眼だ。せいぜい同情者の眼にすぎない。泰介は椅子の背から上着をとつて瘦せぎすな丈の高い肩に着た。第一乙種合格、補充兵歩兵二等兵である。

二時まえに彼は別れを告げて事務所を出た。山根先生の激励の言葉が、不思議に冷淡な他人の言葉にきこえた。所持品をまとめた風呂敷包のみをもち、さむざむとした心で街に出る。街は残暑の日ざかりであるが、泰介は寒かつた。

街を行く人、駅に集まっている人、電車のなかの人、みな他人の顔をしている。自分とは縁のない外国人のようだった。談笑し、雑誌を読み、居睡りしている。自分ひとりとはこれから戦場へ、死に行くのだ。死に行く自分に誰も気がついていない。そぞろに（人生）といううなものを考えてみる。よく解らない。ただ何かしら概きがあるばかりだ。（人生）に裏切られた気持だ。彼は人生に、もつとはかのものを期待していたのだ。

彼は隣席の人と同じように眼を閉じて、榕子のことを思つた。絶ち切られる肉体のきずなが、その痛みに身もだえるようだ。僅か一年にしかならない。女体の秘密をまだ知り尽しては居なかつたような気がする。手の中にある女のからだの量感、足に來る触覚、花の蕊に似た嗅覺そのなまなましい幻想が、ふと自分の現在の立場を忘れさせて、息苦しい喜びにひたつていた。

気がついて見れば、遠からずその二つの肉体の間に東支那海が置かれることになるのだつた。榕子の意志でもなく、彼の意志でもない。国家が夫婦の肉体を引き裂くのだ。抵抗できないものならば、諦めるより仕方がない。

駅からの道を泰介はうつ向きがちに歩いた。残念でならない。召集が来ることは殆んど予定されていたのだ。なせもつと早く避ける方法を考へて置かなかつたらうか。坐して悲運を迎へてしまつたような気がする。

英雄崇拜の気持は彼には無い。軍人の勇敢さというものは子供っぽいものだ。社会運動を断念してからのち、彼は個人主義者になり自由主義者になつていた。無限にひろい社会の上に自己を放出することに失敗してから、彼は自分一個の殻に閉じこもつた。外にひろく良心を抑圧されてから、内に包む彼一人の良心に引きこもつてしまつた。国家は、遠いところにある危険な敵である。彼はなるべく遠ざかつて居たかつたのだ。その国家が、突然彼の眼のまえに立ちふさがつて来た。従わざれば自滅である。従うことによつて辛うじて命を全うし得るかも知れない。死にたくはない。心にもなく、敵を殺して、自分が生きるのだ。

黄色いペンキ塗りの門のなかに百日紅が咲いていた。満開の赤さである。その華やかな色さえも、やはりよそよそしい。自分に對して冷淡な色だ。出迎える妻にむかつてどんな顔をしているのが一番いいか、彼は迷つた。彼の爲に悲しい

しんでもらいたいのだ。いくら榕子が悲しんでも、彼の責任ではない。妻が悲しめば悲しむほど、良人はその愛情のふかさに満足するだろう。門をはいりながら彼は悲痛な顔をしてみた。この期に至つてもなお、芝居気は有るのだ。

榕子は急ぎ足で玄関に出てきた。縞のスカートにクリーム色のブラウスを着ている。外出の支度だ。なぜ外出の支度をしているのか、良人は知らない。彼女が玄関に姿をあらわしたとき、はつとすると美しく見えたので、泰介は却つて眼をそらした。今日にかぎつて妻が美しく見えたのは、彼自身の心の在り方が変わり、妻を見る眼が変つたためかも知れない。

榕子は良人の帽子を受けとり、風呂敷包みをうけとり、鞆をうけとつた。奪うように受けとりながらひとことも言わない。言わないのではなく、言えなかつたのだ。それが泰介の胸にひびく。榕子はその全身をもつて良人のなかに、鋭く錐のようにはいつて来るのだ。ひたむきな女の心が圧倒的に強くて、泰介も容易には口が利けなかつた。

広縁の藤椅子に母がいた。赤いダリヤの咲いた庭にむかつてしんとした顔をしている。心はほかのことを考えているのだ。その心の痛ましさは椅子に腰かけた姿勢に出ていた。通りすぎながら泰介は、

「ただいま」と短く言う。母は顔を上げて、

「ああ」と言つたばかりだつた。

タイを取り、背を向けたままで、

「入隊はいつだ」と訊いた。

「あさつての朝よ」と榕子の声は低い。

「どこか行くのか」

彼女は黙つて浴衣を出し、脱いだものを始末していた。真剣な表情が不機嫌に見える。思いつめた時は物を言わないのが榕子の癖である。

急ぎ足に部屋を出て行くと、冷たいタオルを持つて歸つて来た。それを手渡ししながら、

「わたし今からちよつと、堀内さんへ行つて来てもいいでしょう」と言つた。

「何だね」

彼女は正面から良人の顔を見た。青い眼が燃えている。

「わたし我慢できないのよ」と叱りつけるような厳しさで言つた。「堀内さんに頼んで来ますわ。だつて、いくら考えて見ても、あなたが行くつていうことないわ。何とか方法があると思うの」

「馬鹿、よせよせ。無駄だ」と良人は決定的に言つた。

堀内中将は教育總監部の砲兵監を最後に待命になつた人で、榕子の父の兄玉医学博士が十年以上も出入りしている患家であつた。

「無駄でもいいの。わたし行つて来るわ」

「馬鹿なことを言うんじゃないよ。お前が行つて何とかなるものなら俺が行くよ」

「いいの。私の好きなようにさせて。どうしても行つて見たいんです」

こうなつたら言うことをきく女ではない。心の中の疑いが何とか割り切れてしまわないうちは、いつまでもそのことを考え耽る性質であつた。女は法律の怕さを知らない。女は国家というものの恐ろしさを知らない。退役中将に頼めば兵役法を曲げることができると思っているのだ。その認識不足はひたむきな良人への愛情から来ている。愛情が昂つてくれば国家をも法律をも輕蔑してしまふのだ。

女は愛情だけを信ずる。愛情を阻む法律は、法律の方が悪いと思うのだ。その單純な心が女を強くする。子供のような強さだ。子供が何もしらずに罪を犯すように、女は法律を無視して罪を犯す。榕子は愛情のためには罪を犯しかねない女である。

兵役法が彼女の愛情を阻もうとしている。彼女は敢て法を押しつけるやうとする。それが当りまえだと思つているのだ。そのうえ彼女は実行力をもつていた。思い立つたことはやつて見なくては濟まない女であつた。

榕子は薬學専門學校を卒業してから、葦沢泰介と結婚するまでのあいだ父の病院の薬局を手伝つていた。それで堀内中将の一家とは以前にはかなり親しかつた。彼女はその親しさを信ずる。必ず助けしてくれると考えるのだ。

泰介は法律の力を知っている。

「お前が行つて見たつて、堀出さんに啞られるだけだ」

「啞われたつていいの」

「馬鹿なことを言うんじゃない。退役中將ぐらいの力で法律が曲げられるもんか」

窓の外に池がある。赤い鯉が遊んでいる。池に芭蕉の影が動いている。榕子は窓に立つて鯉を見ていた。良人はうしろからその肩を抱く。ひと筋に良人を失うまいとして心の激している妻が、この上もなく可愛かつた。

「大丈夫だ。死にやしないよ。ちゃんと帰ってくる。安心しておいで」

「安心できるもんですか」と女の悲しみは怒りになつて行つた。「戦争ですもの、どうなるか解りやしないじゃないの。あなたはきつと死にそんな気がするわ。あなたみたいなのが死ぬのよ」

「死んだら死んだで、仕方がないさ」

「いやいやいや！」と榕子は良人の腕のなかで肩をゆすつた。「わたし嫌よ、嫌だわ。とにかく行つて来ます」

「止せと言うんだ。お前が恥を掻くだけだから」

「いいの。恥なんか、何ともないわ」

彼女は鏡台の前からハンドバッグを取ると、小走りに部屋を出て行つた。手に負えない妻である。子供のように我儘でわからず屋で一本氣である。それほどまでに自分のことを考えてくれるのは嬉しいが、泰介は何か索漠とした淋しさを感ずるのであつた。

入れ違いに母がはいつて来た。小肥りの、つやつやとした顔をして、どんな事が起つても少

しも動じない母である。いつも温和で、的確に物事を処理して行く落ちつきはらつた女である。それが兄の節雄と一緒に英国で三年のあいだ勉強してきたおかげかも知れなかつた。榕子とは殆んど対照的な性格である。

「私は子供を兵隊に出すのは初めてだからどうしていいか解らないんだけど、何をして置けばいいのかねえ」

重大問題に立ちむかつていながら、彼女の顔には明るい微笑があつた。そのゆつたりした愛情の方が妻の切迫した愛情よりも、泰介の気持ちをくつろがせてくれるのである。榕子のはげしさは、よく解つて居りながらやはり重荷であつた。

門のまえに幾筋の轢をたてて応召を見せびらかすという趣味は、この家の性格にはないことであつた。近所の世話役や在郷軍人を招いて酒宴をひらくということも嫌いである。泰介は勤めに行く日と同じ様子をして、いつの間にか居なくなつてしまいたいのであつた。駅のホームで軍歌をうたわれたりすることはたまらないほど嫌だ。彼はただ机のなかの紙屑をかたづけただばかりで夜をむかえた。

伯父にあたる清原節雄が来た。榕子の父の兄玉医師は往診靴をもつたまま来てくれた。遅くなつてから泰介の妹とその良人の岡部熊雄と一緒にお別れに来た。それだけであつた。泰

介の弟の邦雄は学生航空研究会の操縦訓練を終えて、夜になつてから帰つてきた。

一人の青年を戦場へ送りだすための別れの宴というものは、一種の葬式のようなものであつた。食卓には麦酒が出された。誰もが言葉もなく箸をとつていた。遅れて岡部熊雄が座に加わると、彼はひとりでしゃべりはじめた。この傍観者は同情という感情をもたないのだ。召集を受けた者に対しても、その妻や両親に対しても、彼等の心をいたわるというデリケートな感情をもつていなかつた。彼は編集長として本能的にニュースを集める。ニュースを雑誌の上に配列する。更に次のニュースに飛びついて行く。一つの事実に踏み止まり、心を沈めてそれを考えて見るという性格をもたなかつた。彼はニュースを集める機械のように無神経で無道徳であつた。

「清原先生、実は今日僕は陸軍報道部に呼ばれてましてねえ、大分あぶらを絞られて来ました。要するに先月いただいた先生の原稿がいかにと言うんですよ。先生の立場は近衛外交の擁護であり、結論としては親米派だと言うんですよ。そういう軍の考え方というやつは要するに近衛外交を否定することになるでしょう。ですから僕は突つこんでやつたんです。軍部と政府とは割れているのかという点をです。すると、沖島少佐が苦しがつて、割れているわけではないと強弁するんですがねえ、実際は割れていますね」

「まあ、そうだね」

「そんな風に政府と軍部との考えが違っていたら、国民は一体いづれを支持すればいいのか聞かせてくれと言つてやつたんですが、沖島先生おこりやがつて、軍は親英米思想を東洋から排除するために戦つてゐるんだと言いましたよ。

それですな、要するに清原先生のような論説は世論をまどわし、軍の行動に対して世間の疑惑を招くことになるから、今後はこういう論説は絶対に許さんと言ふんです。僕は約二時間ぐらい議論して来ましたよ。でも今度は始末書だけで済みました。この次からは始末書ぐらいでは許さんぞ、なんて脅かして居ましたが、まあ、大したことはないです」

早口にしゃべりながら麦酒をがぶがぶと飲み、太い腕で額の汗をぬぐつてはまた語る、健康で若々しくて潑刺たる男である。清原節雄は片方の耳で話を聞きながら、顔は暮れて行く庭のダリヤを眺めていた。

「どこかで破綻が起るね」と彼は意味ふかい、吹きを洩らした。

軍部が君側の奸と称して糾弾してやまなかつた牧野、松平などは、親英米派の中心勢力であつた。二・二六事件で暗殺された高橋は清も五・一五事件で暗殺された犬養毅も親英米派であつた。軍部と親英米政策とは永年にわたつて反撥しあつて来た。軍の内部は親独派でかたまつてゐる。山下奉文中将が独伊両国を視察してこの七月に帰国したのも、親独政策のあらわれ

だ。日本軍部はヒトラー主義を理想としている。その危うさが清原節雄にはよく解るのだ。

「どこかできつと破綻が起るよ」と彼は自分でもうなずきながら言つた。「近衛外交の行きづまりは破綻の第一歩だ。その責任を軍部は近衛に負わせようとしている。しかし責任は軍にあるんだ。仏印南部進駐は君、暴挙だよ。フランスの敗戦につけ込み、ヴィシー政府を脅迫して、要するに南部仏印の米とゴムとを手に入れ、南進基地を設置するといふ一石三鳥をねらつたんだ。あのとき以来、日本に外交といふものは無くなつたと言つてもいいね。外交はないよ。強盗に外交はないからね」

「それは本当です」と岡部が膝を叩いて言つた。「しかし先生、そう言つてしまつては軍部が先生の論文を弾圧するの当りまえですな」

「どうせ軍部とは合わないさ」と清原先生は平然として答えた。

児玉医学博士は二人の話を楽しそうに聞いている。いつでも楽しそうな老人であつた。真白な髪とやや小柄な肥つた体格、健康そうな顔色、どう見ても楽天的な、物事にこだわらない性質の人である。三十年にわたる医者の仕事がこの人を温和な明るい人物に仕上げたもののようである。毎日毎日数十人の病人に接し、その苦痛と悲惨と不潔とを見て来たはてに、楽天的なおだやかな人柄が形づくられて行くといふことは不思議なような気がする。しかし年老いた医師にはよくそういう人格が見られるものである。

彼自身は何主義でもなく何派にも加わりはしないが、あらゆる人々の考え方を包含して大きく豊かな、そして温い心をもっているのだ。

彼は清原先生の話を聞きながら、榕子の表情の動きをも氣をつけて見ていたのだ。僅か一年の結婚生活で良人を戦地へやるうとする娘の心が可哀想でならない。しかし児玉先生の表情に曇りはない。死に瀕している患者の脈を笑顔で数えるのと同じように、悲痛な思いにいら立っている榕子の姿を笑顔で見まもっているのだ。そのやわらかな表情の底にはひろい豊かな愛情が、仏の慈悲とでもいふような愛情が、決して激することのない静かさで湛えられているらしい。彼の医学は患者の心をあたためてやりながら、いつの間にか彼自身の心をもあたためたかにの仕上げたのである。

彼の二人の息子は今年の春から相ついで応召し、一人は満洲に、一人は九州の海軍航空隊に行つてゐる。残つてゐるのは専門学校一年の娘ばかりだ。しかし児玉博士の顔は平和で明るい。諦めの明るさかも知れない。彼の眼から見れば、あらゆる人間が患者である。あるいは彼自身をさへも、患者としていたわつてゐるのかも知れない。

食事が終ると児玉博士は廊下の藤椅子に出て泰介と向いあいになつた。榕子が水蜜桃を入れた硝子鉢を持つて来た。

「わたし今日堀内さんへ行きましてわ」

「そうか、お元氣だつたかね」と父は答えた。